アルケイアー記録・情報・歴史ー
第一一号　二〇一七年三月　一ー二八頁
南山アーカイブズ
特集「資料論Ⅰ」

歴史の物語り論（ナラトロジー）論争をめぐって

服部　裕幸
南山大学人文学部人類文化学科

Controversy on Postmodernism in History

Department of Anthropology and Philosophy, Faculty of Humanities,
Nanzan University
HATTORI Hiroyuki

Archeia: Documents, Information and History
No.11 March, 2017 pp.1-28
Nanzan Archives

初めに
一　議論の背景
二　歴史の物語り論の概要
三　歴史の物語り論に対する実証主義者の批判
四　歴史の物語り論と実証主義はどれほど違うのか
五　結びに代えて

歴史の物語り論（ナラトロジー）論争をめぐって(*)

服部　裕幸

初めに

筆者は歴史学の専門家でもなければ、歴史哲学について長年にわたって研究をしてきたわけでもないので、本稿のテーマを自らが論ずることに抵抗がないわけではない。しかしまた、哲学には（その定義上）専門はない（と教室では話し、実際そのように信じてもいる）以上、このテーマについて自らが語ることを禁ずる必要もないと考えている。そこで、本稿では、蛮勇を奮って、このテーマに関して筆者が思うところを少し述べてみようと思う。とはいえ、このテーマでの研究歴はほとんどないので、先行研究を渉猟するなどということはとてもできない。ここでは野家啓一著『物語の哲学』（岩波現代文庫二〇〇五）とそれに対する遅塚忠躬著『史学概論』（東京大学出版会二〇一〇）における批判を議論の主な材料として用いることによって、いわゆる歴史の物語り論論争について、ひいては歴史学の性格について、筆者なりの見解を披露し、諸賢のご意見をたまわりたいと思う次第である。

一　議論の背景

筆者は最近、野家啓一の「歴史の物語り論」とそれに対する遅塚忠躬の批判に接する機会をもった。これはまったくの偶然にすぎないのであるが、双方のやり取りを見て、筆者が学生の頃に読んだE.H.カーの『歴史とは何か』（岩波新書一九六二）を思い出さざるをえなかった。当時の筆者には、カーの本のその当時における意義や、その本が歴史家たちによってどのように評価されたかなどについては、むろん、知る由もなかったが、今改めて読み返してみると、昨今の歴史哲学論争のポイントをしっかり押さえているように思われる。そこで、本論に入る前に、この本のポイントを、本稿に関わりのある範囲で、簡単に紹介しておこう。

カーによれば、十九世紀は「事実尊重の時代」であり、実証主義が強大な影響力を持っていた。ここで、「事実尊重」とか実証主義ということで彼が言わんとするところは次のような歴史についての見方のことである。「歴史は、確かめられた事実の集成から成る…歴史家にとっては、事実は文書や碑文などのうちで手に入れることができるわけです。歴史家は事実を集め、これを家へ持って帰り、これを調理して、自分の好きなスタイルで食卓に出すのです。」（カー一九六二、五頁）ところが、二〇世紀になるとそうした歴史観は後退し、それに代わって「歴史家は自分の好む事実を手に入れようとする…歴史とは解釈のことです。」（カー一九六二、五頁）という言葉に象徴的に見られる、解釈主義とでも呼べるような見方が力を持ってきた。というのも、実証主義が神聖視する事実というものがそもそも、歴史家（の関心）によって選択されたものだからである。「歴史家は必然的に選択的なものであります。歴史家の解釈から独立に客観的に存在する歴史的事実という堅い芯を信じるのは、前後顛倒の誤謬であります。」（カー一九六二、九頁）

しかし、カーは解釈主義に共鳴しつつも、それに全面的には与しない。というのは、解釈主義の行き着くところは、ある種の「懐疑主義」ないし「プラグマティズム」にならざるを得ないからである。「これ［＝解釈主義］を論理的帰結まで押し進めますと、そもそも、すべての客観的歴史を排除することになり、歴史は歴史家がつくるものだということになってしまいます。」（カー一九六二、三三頁）「結局、これでは完全な懐疑主義に陥ることになり」歴史家としては受け入れがたいというわけである。そこでカーは、この二つの立場を折衷するような第三の道を模索し、「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話」（カー一九六二、四〇頁）であると結論するのである。

筆者の見るところでは、カーの折衷策は成功していないように思われる。というのも、いかに「現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話」というようなレトリックを用いようと、過去が歴史家の現在の（仮の）主観的解釈によって選択され、その過去によって当初の解釈が変更されることがあるにしても、過去が歴史家の解釈を介在してはじめて存在する以上、結局は「正しい解釈の基準は現在のある目的にとっての適合性であるという主張」（＝カーの言う意味でのプラグマティズム）になってしまうのであり、解釈主義に陥らざるを得ないからである。そしてこれはカー自身が批判していたところなのである（カー一九六二、三五頁 参照）。

さて、それはともかく、近年の歴史の物語り論とそれに対する批判、および、その論争を止揚しようとする試みは、このカーが提起した問題とその解決策の模索の、新たな装いのもとでの再現と言えると思う。すなわち、解釈主義の代わりに「言語論的転回」[1]論ないし歴史の物語り論が、実証主義の代わりに「柔らかな実在論」[2]が、それぞれ代役を務め、両者の間で激しい論争をしているようなのである。

二　歴史の物語り論の概要

歴史の物語り論とは何か。それはどのような主張なのだろうか。それは、スローガン的に言えば、「歴史[学]は科学ではなく、文学なのだ」という主張と言えよう。こういう表現をすると、とんでもない見解だ、物を知らないにも程がある、という声が聞こえてきそうなので―そして、実際、物語り論をきちんと理解せずに批判をする人々の中にはそうした感情的反応をしているだけの人も少なくないのではなかろうか―、ここではこの主張が正確には何を意味しているのかを、日本におけるその代表的論者である野家啓一の著作に基づいて明らかにしたい。

物語り行為[3]とは

そもそも、物語りとは何なのだろう。人が何かを物語るとはどういうことなのだろうか。野家は次のように述べる。「『出来事、コンテクスト、時間系列』という要件を備えた言語行為を、とりあえず『物語行為』と呼んでおこう。」（野家二〇〇五、一七頁）「経験を伝承し共同化する言語装置をわれわれは『物語』と呼ぶことができる。」（野家二〇〇五、八三頁）この定義からわかることは、いわゆる（架空の）物語のみならず、現実世界の出来事についても、それを何らかのコンテクストと時間の流れの中で語れば、それは物語りになるということである。

具体的にはどのようなものがこの意味での物語りなのだろうか。野家によれば、「物語文はすべて、原則的に因果関係を表現する文に書き直すことができる。」（野家二〇〇五、八五頁）したがって、たとえば、「私が提案した奇襲作戦は味方の部隊を勝利に導いた」という文は物語文である。

このような物語りの定義との関連で忘れてならないのは、この定義の背後には、出来事を孤立的に捉えて語るこ

とは意味をなさない、あるいは、それだけでは経験を構成することができない、という見解が潜んでいるということである。すなわち、「物語行為こそが『経験』を構成するのである。」（同頁）そして、この見解は重大な帰結をもたらす。すでに見たように、物語りの構成要素の一つにコンテクストが含まれていた。したがって、「コンテクストが変化すれば、過去の出来事の意味づけもまた変わらざるをえない。」（野家二〇〇五、八八頁）そうであるならば、コンテクストが変われば経験も変わるということになる。事実、野家は次のように述べる。「経験はある時点で完結することは決してない。…経験は生成し、増殖し、変容し続けるのである。」（野家二〇〇五、八七―八八頁）

もう一つ重要なのは、「出来事を孤立的に捉えて語ることは意味をなさない」という点であるが、これについては後で述べることにしよう。

過去の出来事について

歴史の物語り論が従来の解釈主義と顕著に異なる点があるとすれば、その一つは、物語り論が過去について反実在論的立場を鮮明に出しているという点であろう。「過去の出来事は『描写』されるのではなく、…想起的に『構成』されるのである。」（野家二〇〇五、一一四頁）「経験を語ることは過去の体験を再生ないし再現することではなく、過去の体験は経験を語る物語行為から独立には存在し得ない。」（野家二〇〇五、一一六頁）

このように言うと、直ちに、二人の人の間で過去の出来事についての証言が異なった時、どちらが正しいかを過去の客観的事実に照らして判定するができるはずだし、またそうすべきだ、という反論が出そうである。しかし、このような反論に対して野家は次のように応ずる。「いずれの証言が正しいかは、過去の事実との照合によってではなく、彼らの他の発言や別の目撃者の証言との『整合性』によって決められるほかはない。過去に関する言明の

真偽を決定する基準は、事実との『対応』ではなく、他の諸々の言明との『整合性』、つまりは過去を語る『物語の筋の一貫性』なのである。」（野家二〇〇五、一一八頁）

この事情は、物的証拠を持ち出して論じても変わらない。というのは、「[物的証拠]は過去の事実そのものではなく、『過去の痕跡』であるにすぎない。われわれは、物的証拠という『過去の事実』と想起内容とを比較しているわけではなく、物的証拠という『過去の痕跡』から遡及的に再構成された過去の事実との整合性を確かめている」（野家二〇〇五、一一八―一一九頁）だけだからである。

歴史的事実は解釈学的事実である

かつてカーは「過去に関するすべての事実が歴史的事実であるわけではない」（カー一九六二、六頁）と述べ、歴史家の何らかの判断ないし解釈が加わって初めて歴史的事実になると主張した。そうして彼は、解釈主義的歴史観に一定の妥当性を認めたのであるが、物語り論者はより深いレヴェルで歴史的事実の解釈依存性を主張したのである。過去の事実は語られねばならない。しかし、語る（＝物語る）という言語行為そのものからして、過去の事実は解釈学的事実にならざるを得ない。したがってもちろん歴史的事実もそうなるのである。「歴史的事実は、ありのままの『客観的事実』であるよりは、むしろ物語行為によって幾重にも媒介され、変容された『解釈学的事実』と呼ばれねばならない。」（野家二〇〇五、一二二頁）歴史家の中には、解釈される前の生の史料がある、と言いたく思う人がいるかもしれないが、それは物語り論者によれば錯覚に過ぎない。「文献史料は言語による記述であることによって、ありのままの過去を再現する手段ではなく、すでに『解釈』の産物なのである。」（野家二〇〇五、一二二頁）

歴史的出来事は歴史叙述と不可分

先に、物語り論者によれば過去の経験について物語ることで経験は経験として成立する、と述べたが、このことは物語り論者の言う意味での物語り（行為）と独立には過去の出来事は存在しない、ということを意味する。すなわち、「想起と切り離された『過去自体』が存在しないように、歴史叙述から独立した歴史的出来事も存在しない」（野家二〇〇五、一六七頁）のである。

しかし、次のような疑問も抱く向きもあろう。すなわち、同一の出来事に対していくつかの異なる記述が与えられる、という事態があるのではないか。もしそうであるとすれば、記述、つまり叙述とは独立な出来事があるということではないのか。このような疑問に対して野家は、私たちの知覚についての現象学的分析を援用して、次のように答える。「複数の歴史叙述は、それぞれが同一の歴史的出来事の「射映(Abschattung)」と考えられるべきものである。…無数の知覚的射映の志向的統一が一つの事物であるように、射映する無数の歴史叙述の志向的統一こそが一つの歴史的出来事なのである。」（野家二〇〇五、一六八頁）筆者は現象学の専門家ではないが、ここで言わんとするところは、おおむね次のようなことである。今私が椅子に腰掛けて、目の前のテーブルの上のウィスキーの壜とグラスを見ているとしよう。このとき、私には茶色のテーブルの上に、その壜の、ラベルの張られた側が見えている。壜の右横には琥珀色の液体が半分ほど入っているグラスも見える。壜の左側横のテーブルの表面には壜の影が見える。もちろん、壜の裏側は見えていない。私が立ち上がると、こうした景色は大きく変わる。縦長に見えていた壜はもはやそこにはなく、やや短く見える。先程はかすかに斜めに見えていたに過ぎないキャップが、今やかなり丸くはっきりと見える。グラスに入った液体も、先程はグラス越しに見えていただけであるが、今や真上からじかに見える。さて、私がテーブルの周りを回って反対側に移動すると、こうした景色はまた大きく変わる。グ

ラスは壜の左側に見え、壜の影は右側横のテーブルの表面に見える。壜の表面にはもはやラベルは見えない。今、三つの記述を例として与えたが、私の移動は連続的に行なわれたので、当然のことながら、この三つの記述の間には無数の異なる景色の記述が存在する。さて、こうした景色（の記述）が、引用文中の「知覚的射映」と考えてよい。この場合、重要なことは、私にはいつの時点でも、一つの景色しか見えていない（すなわち、一つの景色しか経験されていない）、ということである。私が経験する壜は、ある時にはグラスの左側にある壜であり、別の時にはグラスの右側にある壜である。そうした仕方での経験を超えた壜など、（おそらく経験の定義上）経験できないのである。しかし、このような事態を日常的には「（表側もあり、裏側もあり、底もあり、上部もある）同じ（一つの）ウィスキーの壜を見ている」という表現で言い表すのである。歴史叙述と歴史的出来事の関係もこれと同様なのである。たとえば、一方で「私が提案した奇襲作戦は味方の部隊を勝利に導いた」という叙述が与えられ、他方で「私が提案した奇襲作戦は大局の戦略を誤らせる結果となった」という叙述が与えられたとしても、これは同じ歴史的出来事についての「射映」なのであり、こうした「射映」の「志向的統一」が歴史的出来事なのである。そして、こうした「射映」（すなわち叙述）と独立の歴史的出来事などといったものは存在しないのである。

どの「物語文」が正しいのか？

ところで、架空の人物や架空の出来事などの場合に典型的に見られることであるが、物語りは一般にはいろいろとあり得る。しかし、中には、いわゆる「実在の人物」や「実際の出来事」についての物語りもあるであろう。このとき、同じ人物や同じ出来事について異なる物語りがなされるということも起こりうることになる。その物語りがいわゆる小説であれば、このようなことが起っても不思議ではないし、何の不都合もない。しかし、歴史（学）

の本となるとそういう訳にはいかないのではないか。そこでは当然、どの物語り（＝歴史叙述）が正しいのか、ということが問題になるのではなかろうか。この疑問に対する野家の見解は、先の「証言の正しさ」についての考え方と基本的には同じであるはずである。すなわち、「他の諸々の言明との『整合性』、つまりは過去を語る『物語の筋の一貫性』」のある方が「正しい」のである。ここでは「正しい」とは「整合的であること」にほかならない。(4)

この見解を採用すると、いわゆる新しい歴史的史料の発見などによる通説の「反証」と称するものについての考え方も若干の見直しを迫られることになる。すなわち、「予期せぬ考古学的発掘や未公開の古文書の発見など新たな『証拠』が見いだされることによって、既成の物語文が『主張可能性』を失い、重大な修正を迫られるかもしれない。だがその場合にも、どの物語文が否定されるかは一義的に決まるわけではない。どの物語文が否定あるいは修正されるかは、ネットワーク全体の「整合性」に基づいて決められるのであり、そこには複数の選択肢がありうるのである。」（野家二〇〇五、一八〇頁）ここではクワイン流の全体論が下敷きにされている。（野家二〇〇五、一七九頁 参照）

以上、物語り論者の見解の概要を野家啓一の著作を参考に整理してみたが、歴史を文学と同列に置く見解に対しては、それがいかにもっともらしく語られようと、実証主義的な歴史学者の理解を得ることは難しいようである。次節では彼らの批判を見てみよう。

三　歴史の物語り論に対する実証主義者の批判

前節で見たように、歴史の物語り論によると、歴史的事実を研究する歴史学と虚構の作品である文学とは同じ（レベルの）ものになってしまう。しかし、これは現場の歴史家の行なっていることを正しく捉えた見方とはとても思えない、という疑問ないし不満が出てくるのはほとんど必然であろう。この疑問に対して歴史の物語り論は答えを用意しているが、まずは、このような疑念に基づいて歴史の物語り論を批判する論者（実証主義者）の見解を、遅塚忠躬の著作を参考にしつつ、見てみよう。

批判者の基本的立場

歴史学者である遅塚は、まず歴史学者の作業の論理的なプロセスを次のようにまとめることから議論を始める。

歴史学の作業工程

遅塚によれば、「われわれは、…歴史学を、過去の事実を研究して仮説を提示する営みであるとみな」す。（遅塚二〇一〇、一一五頁）「われわれは、史料［＝過去の残した痕跡］を通して事実を知るのである。」（同頁）

「歴史学の営みを分解して作業工程表を作ってみれば、次のようになる。…

①問題関心を抱いて過去に問いかけ、問題を設定する。

②その問題設定に適した事実を発見するために、雑多な史料群のなかからその問題設定に関係する諸種の史料を選び出す。

③諸種の史料の記述の検討…によって、史料の背後にある事実を認識…する。
④考証によって認識された諸事実を素材として、さまざまな事実の間の関連…を想定し、諸事実の意味…を解釈する。
⑤その想定と解釈の結果として、最初の問題設定についての仮説…を提示し、その仮説に基づいて歴史像を構築したり修正したりする。」（遅塚二〇一〇、一一六頁）

客観的事実は存在する

上で述べたように、遅塚によれば、歴史学者は過去の事実を出発点とし、（論理的には）その後で、その事実の歴史的意味を探ったり、解釈を与えたりするのである。とすると、そうは言うものの、遅塚の言う「事実の認識（いわゆる実証）という作業③と、事実の解釈という作業④とを論理的に切り離すことができるのか」という疑問に対して、遅塚はどう答えるのだろうか。そもそも歴史家の主観から独立した事実などというものはないのではないか、という解釈主義者ないし物語り論者の疑問に対して彼はどのように答えるのであろうか。まず、これらの疑問に対しては、彼は基本的には「そのような切り離しは可能であり、したがって歴史家の主観から独立した事実は存在する」と答える。

「史料の解釈という作業は、媒体たる史料の背後に客体たる事実が実在することを前提にしている。この前提は…アプリオリな前提であるが、史料に『痕跡』が記されているのなら、その痕跡のもとになる何らかの『事実』…が実在すると想定するのは、当然」なのである。（遅塚二〇一〇、一二三頁）そして、「史料の解釈は、この前提のもとで、…痕跡の背後の事実を認識しようとする行為である。他方で、事実の解釈は…その事実のもつ意味を検討

しようとする行為である。」（同頁）

このように解釈主義に対して応ずるのであるが、実際には事実の認識と事実の解釈の分離が難しいケースがあることを彼は否定しない。そこで、彼はより細かい議論を展開することになる。まず彼は、歴史的事実を分類することから始める。彼によれば、事実と一口に言ってもそれには三種類があるのである。すなわち、構造史上の事実、事件史上の事実、文化史上の事実、この三つである。ここで、「構造史上の事実というのは、たとえば、ある男 or 女…が生まれたとか死んだとか、ある市場である商品が売買されたとか、ある男が領主にある額の貢租を納めたとか、ある裁判所である男が裁かれたとか、ある男がある書物を買ったとかいうような事実である。」（遅塚二〇一〇、一三七頁）構造史上の事実はそれ一個だけではほとんど意味を持たないが、反復的な大量現象になると意味を持つことになる。これに対して、「事件史上の事実の代表的な例は、源頼朝が鎌倉幕府を開いた…とかいう事実」（遅塚二〇一〇、一三八頁）である。文化史上の事実は構造史上の事実と事件史上の事実の中間に位置する。これは、「主として、個人の域を越えた人間集団（村や町の住民から身分や階級や国民にまで及ぶ集団）の習俗…や心性…や社会的結合関係…や政治文化…などを示すような事実である。」（遅塚二〇一〇、一四一頁）遅塚はそのような例として、ジョルジュ・ルフェーヴルの指摘した、フランス革命初期に農民の間に「アリストクラートの陰謀」という言説が生じたという事実を挙げている（遅塚二〇一〇、一四一―一四二頁参照）。

さて、「文化史上の事実は、表象と解釈に依存している。」（遅塚、一五〇頁）したがって、文化史上の事実に関しては、物語り論は全面的に妥当することになる。「こういう文化史上の事実にこそ、『転回論』［＝解釈論、物語り論］が全面的に妥当するのである。」（遅塚二〇一〇、一九〇頁）しかし、構造史上の事実に関しては事実とその解釈は完全に分離可能である。

歴史像（歴史学の仮説）の構築（事実についての歴史家の解釈）の妥当性

解釈の妥当性、つまり歴史学の仮説の妥当性は、それが論理的に整合的であるか、また反証テストに耐えているか、によって判定可能であると遅塚は考えている。歴史の物語り論との比較で特に重要なのは、後者である。というのは、「物語り論［は］歴史学の反証可能性を機能不全にする」（遅塚二〇一〇、一九九頁）からである。

上で見たように、遅塚によれば、構造史上の事実に関する限り、事実はその意味や解釈と独立に存在しうる。したがって、ある解釈が妥当であるかどうかが問題になったときには、その解釈に基づいて何らかの予想をたて、その予想を裏付ける事実を探す、という仕方で、解釈の妥当性を問題にすることができる。要するに、歴史家の解釈はK．R．ポパーの言う意味での反証テストにかけることができるというのである。「歴史学における立証や反証の大半は、物語りの筋の一貫性だけを規準にしているのではなく、事実立脚性を規準にしているのだ。」（遅塚二〇一〇、二〇一頁）

たしかに、「そういう反証理論によるテストは、新しい命題や選び出された命題や修正された命題が、他の命題に比べて、さしあたりの…相対的優位性をもつことを保証するのみ」（遅塚二〇一〇、三五三頁）ではあるが、それでも、歴史家によるすべての解釈を同じように扱う必要はないのである。

歴史学と（歴史）小説は明確に区別される

以上のような議論からいかなる結論が導かれるかはもはや明らかであろう。「歴史学と文学との間の重要な相違点の一つは、おそらく、歴史学の描く歴史像が反証可能性によってその客観性を担保されているのに対して、文学作品についてその反証可能性を論じることはナンセンス（無意味）だ、という点にある。」（遅塚二〇一〇、二〇三頁）

かくして、遅塚は、歴史学と小説を同列に扱う物語り論は誤りであると主張するのである。

四　歴史の物語り論と実証主義はどれほど違うのか

歴史の物語り論と歴史の実証主義は、そのスローガン的な主張のみを見てみるとまったく相容れない立場のように見える。というのも、一方においては歴史学と小説が同列におかれるのに対して、他方においてはそうではないとされるからである。しかし、第二節及び第三節で見たように、それぞれの論者（本稿では野家と遅塚）の主張を子細に見てみると、実は両者はそれほどかけ離れていないように見える。実際、遅塚は「文化史上の事実に関しては、物語り論は全面的に妥当する」とさえ述べているのである。とはいえ、両者が決定的に違うところもたしかに存在する。それは、物語り論が解釈と切り離された過去の事実の存在を全面的に否定するのに対して、批判者たちが、少なくとも構造史上の事実に関しては、解釈と独立に過去の事実が存在すると考える点である。そこで、この点についての彼らの論証をもう少し細かく見る必要がある。

歴史家の解釈とは独立に、（構造史上の）事実が存在するという論点をもう一度見てみよう。「史料の圧倒的部分は書き手による表象の産物である」と「転回論者」（＝解釈論者、物語り論者）は考えるようだが、遅塚の見るところでは、「われわれの依拠する史料のなかには、記述史料以外に、記述者の解釈が介入する余地のない事実そのものの記録もまた大量に存在する」（遅塚二〇一〇、一二二頁）のである。それが構造史上の事実と言われるものである。それは具体的にはどういうものなのだろうか。前に引用したが、労をいとわずに再度示しておこう。

「構造史上の事実というのは、たとえば、ある男 or 女…が生まれたとか死んだとか、ある市場である商品が売買されたとか、ある男が領主にある額の貢租を納めたとか、ある裁判所である男が裁かれたとか、ある男がある書物を買ったとかいうような事実である。」（遅塚二〇一〇、一三七頁）「構造史上の事実は、それ一個だけではほとんど意味を持たないが反復的な大量現象になってはじめて意味をもつような事実、である。」（遅塚二〇一〇、一三八頁）

このような主張に対して解釈論者あるいは物語り論者はどう応ずるのだろうか。カー[3]なら次のように論ずるだろう。物語り論を批判する人々は過去の事実と歴史的事実を混同している、と。まず「歴史上の事実を過去に関する他の事実から区別する」（カー一九六二、一一頁）したがって、歴史的事実は歴史家の解釈と独立には存在しえない、と。

しかしながら、この議論に対して遅塚は、歴史家が何らかの問題意識や仮説から出発して事実を探索し、集めるということは認められるが、そのことはそうした問題や仮説と論理的に独立した事実の存在を否定はしない、と論ずるだろう。（遅塚が事実と解釈を区別していたことを思い出すべきである。）

したがって、カーのような議論では、解釈に依存しない構造史上の事実の存在を否定することはできない。しかし、上のような遅塚の反論に対して、物語り論者の野家は次のように応ずるのである。「仮に関税を野菜にかけても果物にはかけないという課税制度があったとすれば、トマトを野菜と解釈するか果物と解釈するかが議論になったはずです。課税対象が一定の収入がある成人男子に限られていたとすれば、記述者は当該人物が課税対象であるか否かの解釈を必要とすることでしょう。それゆえ、いっさいの解釈や判断から独立した『裸の事実』なるものがあるとは思われません。」（野家二〇一六、一九八―一九九頁）

この主張に対して、遅塚は、それでも誰それがこれこれに対していくらの税を払ったという事実は記述者の解

釈からは独立だ、と反論できるかもしれない。そこで野家はさらに強い主張をすることになる。「「構造史的事実、事件史的事実、文化史的事実の」どのレベルにも解釈はあまねく浸透しているのであり、解釈ゼロの『揺らがない事実』があるとは私には認めがたいのです。そこに見られるのは、…『種類の差(difference in kind)』ではなく、『程度の差(difference in degree)』であるに過ぎません。」(野家二〇一六、一九九頁)そして、このことは実は遅塚自身も認めるところであることを野家は確認する。「遅塚さん自身が言われるように、『何の概念も用いずに事実を事実として語るというのはほとんど不可能であり、多くの場合、言語による事実の表現にははじめから、ある概念の使用という解釈が含まれている』(七六頁)からです。」(同頁)

かくして、理論的に言えば、物語り論者と実証主義者の間の対立と称するものは、解釈と独立の事実の存在という点に関するかぎり、見せかけのものであるように思われる。

それでは、物語り論者と実証主義者はお互いになぜ激しく反発し合ったのだろうか。本当の対立がないのだとしたら、むしろ、彼らの論争がなぜ起ったのかが不可解に思えてくる。しかし、この疑問に対しては、より深いレベルにおいてたしかに本当の対立があるのだ、と答えられそうなのである。それでは、その「より深いレベルにおける対立」とは何なのだろう。この点を以下で明らかにしていこう。

たとえば、野家はある箇所で次のように述べている。「歴史的出来事は『物語り行為』によって構成される。」(野家二〇一六、九五頁)「これは歴史家なら誰でもが実行している当たり前のことにほかなりません。」(同頁)「赤外線や紫外線の『色』を問うことが無意味なように、『過去自体』がどのようなあり方をしているかをわれわれは有

意義に問うことはできないのです。」（野家二〇一六、一四六頁）「むろん、『過去自体』の存在を否定することと、『過去の実在』を否定することとはまったく別の事柄です。」（同頁）ここから明らかなように、野家によれば、過去の実在とは、要するに構成された過去の実在にすぎない。その意味で彼は過去に関する反実在論の立場をとるのである。

これに対して、遅塚は、「歴史学の営みの対象であり素材である『事実』は、スポットライトの点灯に先立って（解釈や選択に先立って）、客観的に（解釈や選択から独立して）実在しており、スポットライト照射以後も実在し続けるのである。」（遅塚二〇一〇、一七七頁）と述べている。別の箇所では「野家氏が反実在論を強調するのは、歴史家のなかに実在論が根強く見られるからであろう。私自身は、事実については実在論をとる。」（遅塚二〇一〇、一九五頁　注）「私は、基本的には、［過去の］事実について実在論の立場をとるのである。」（遅塚二〇一〇、二〇六―二〇七頁）と明白に述べる。

このように、物語り論者が過去についての反実在論をとるのに対して、その批判者は実在論をとるのである。こうなると、両者の違いは「程度の違い」などではありえない。

しかし、この対立はいわば形而上学的対立であり、どちらが正しいかの決着を簡単につけられるようなものではない。ここではその判定を行なうのではなく、なぜ両者がそれぞれの立場をとりたいと思うのか、また、彼らのその思いは、不可避的に、彼らにその立場をとることを要求するのか、といった点を考えてみたい。

反実在論は、その見掛けにもかかわらず、実は哲学者の言う意味での経験主義に忠実な立場である。その要は、われわれは現に手にしている情報に基づいてのみ語るべきであり、それを超えたことを語るべきではない（し、前提すべきでもない）、という点に尽きる。ダメットが数学に関して反実在論をとり、したがって論理としては古典

二値論理ではなく、直観主義論理（構成主義論理）を採用すべきだと主張するのもこの精神に基づいている。[6] それゆえ、物語り論者は次のような語り方をするのである。「過去はわれわれの探究に先立ってあらかじめ真偽が確定しているような仕方で存在しているものではありません。過去はそれを『確認する方法』に応じて姿を現してくるものであり、『探究』の手続きと不可分のものなのです。」（野家二〇一六、一七八頁）

これに対して、実在論者は、その主張の（常識的という意味での）自然さにもかかわらず、厳密に言えば、われわれが現に手にしている情報を超えたことを語る（ないし前提している）のである。[7] たとえば、実証主義的歴史家が客観的事実とか事実的証拠と称するものの典型例は歴史的史料であろう。これについて遅塚は、第二節で紹介したように、次のように考えている。すなわち、「史料の解釈という作業は、媒体たる史料の背後に客体たる事実が実在することを前提にしている。この前提は…アプリオリな前提であるが、史料に『痕跡』が記されているのなら、その痕跡のもとになる何らかの『事実』…が実在すると想定するのは、当然」である（遅塚二〇一〇、一二三頁）と。われわれの目の前にあるもの（＝史料）は過去の痕跡にすぎない。そこから直接得られる情報は、厳密に言えば、目の前に古ぼけた紙片があること、その表面に文字とおぼしき模様があること、等々にすぎない。しかし、そうしたものからわれわれは、その文字を書いた人間の存在を推測し、その人間が自分の考えたことを記したものと推測し、その文字とその考えとの間にある何らかのコードを推測し、等々の作業を行い、たとえばx年y月z日に誰それが誰それに〇〇を売ったという事実があったと主張するのである。このような推測作業（の存在）はあまりにも自然であり、当然のことなので、通常は意識されないが、物語り論者はこれを「構成」と呼び、構成されたものは実は初めから存在していたものとは考えない。しかし、実証主義者はこれらが初めから存在していたと考えるのである。

それでは、なぜ、物語り論を批判する実証主義者は実在論をと（りたくな）るのだろうか。彼らが実在論をとりたくなる動機は何なのだろうか。論理的にどうか、ということを別にすると、心理的には、その動機は理解できるように思われる。それは端的に言って、歴史学を科学にしたいからであろう。[8] あるいは、歴史認識の客観性を主張したいから、と言い換えてもよかろう。そして、このためには（過去の）事実[9]が認識主体（＝歴史学者）とは独立に存在することが必要、すなわち実在論をとる必要があるように思われるのであろう。事実、遅塚は次のように述べている。「われわれは高度に客観的な歴史認識（命題）を獲得しうる、という例を…指摘しうる。」（遅塚二〇一〇、三七一頁）「事実認識についての『柔らかな実在論』と歴史認識についての『柔らかな客観性』とが手を結びうるし不可分でもある。」（同頁）では、歴史認識の客観性と実在論はどう関係しているのだろうか。

歴史家は自分の研究対象としたものについての歴史記述なり歴史的説明を与えるわけであるが、その対象に対して他の歴史家が別の記述や説明を与えるということもあろう。要するに異なる歴史解釈が提案されることもあるのである。するとどちらの解釈が正しいのかという問題が生じる。このとき、どちらもオーケーというのでは、科学とは言えない。そこで登場するのが解釈とは独立に存在する事実によるテスト、というアイディアである。そのような事実によるテストにパスした方が正しい解釈だというわけなのである。（遅塚二〇一〇、三五三頁を参照。）事実が解釈から独立でなければならないと考えられるのは、そうでなければ中立性が担保できない、という理由であろう。これからテストしようとしている当の歴史解釈に事実が依存していたのでは、事実によるテストが意味をなさないからである。

さて、このように、歴史解釈や歴史的説明の妥当性を「事実によってテストする」ためにはその事実は解釈から独立でなければならない、と実証主義者は考えているようである。遅塚はこの「事実によるテスト」を、ポパ

ーの反証理論の言葉を用いて「反証テスト」と呼び、これがあるが故に歴史学の客観性が確保されていると考える。たとえば彼は次のように述べている。「われわれは、歴史認識の客観性の根拠を反証テストに求めた。」（遅塚二〇一〇、三五九頁）しかし、実はここにはポパーの理論に対する誤解があるように思われる。ポパーの考えでは、科学的な仮説は全称形式の命題（典型的には法則という形）で述べられていなければならない。そのときにかぎって、観察や実験による個別的な反例の存在を示すことによってその全称形式の命題（仮説）は反証されうるのである。しかし、歴史学の場合、そもそも歴史的仮説はそのような全称形式の命題なのだろうか。まずこの点が疑問である。実際、遅塚が反証の例としてあげているタケットの論文へのコメントで彼は次のように述べている。「この論文の中核は、大恐慌の以前および最中の農村では陰謀という観念の存在を示す『史料上の証拠(preuves documentaries, empirical evidence)』がほとんどない、という反証である。ここでは、その反証の当否は問題ではない。従来の定説に対する反証がこういうかたちで進められていることだけを知ればよいのである。」（遅塚二〇一〇、三五八頁）明らかに、ここで考えられている反証とはある種の史料が存在しないということであるが、それはまだ見つかっていないというだけである。未来永劫にわたってそのような史料が存在しないということが示されているわけではない。（したがって、「大恐慌の以前および最中の農村では陰謀という観念の存在」という仮説がポパーの意味で反証されたわけではない。そもそも、存在命題を経験によって反証することは論理的に不可能である。）これに対して、ポパーの言う反証とは、理論的には、一つでも反証事例が存在することが示されれば、仮説として提示された全称命題は、もはや未来永劫にわたって正しくはないことになる、というものである。これがポパーの言う意味での（仮説の）反証ということなのである。[10] 筆者の見るところ、遅塚の考える事実によるテストは、ポパーの反証理論よりはカルナップ流の確証(confirmation)理論と相性がいいように思われる。しかし、そう

だとすると、事実によるテストとは、野家の言う「他の諸々の言明との『整合性』、つまりは過去を語る『物語の筋の一貫性』」とそれほど違わなくなってしまうのではなかろうか。

野家と遅塚の対立には、事実によるテストに関する科学哲学上の立場の違いも反映しているように思われる。すでに見たように、遅塚が（誤解があるようだが）ポパーの科学哲学を下敷きにしているのに対して、野家は（ハンソンやクーンの）「新科学哲学」を下敷きにしている。どちらの立場も科学の科学たる所以はどこにあるかということを論じている。したがって、「新科学哲学」の立場に立ったからといっていわゆる科学が科学でなくなるわけではない。遅塚は、野家のような物語り論では歴史学の科学性が脅かされると危惧しているようだが、それは（野家に言わせれば）杞憂である。野家が「新科学哲学」の立場に立って歴史学を論じ（てそれに成功し）たとしても、歴史学は科学たりうるだろう。そもそも物理学のような典型的な科学でさえも、「新科学哲学」の立場では、（極端な言い方をすれば）ある種の小説とは連続的ということになるからである。[11]

ポパー派の科学哲学とクーン派の科学哲学の間では一九七〇年代に激しい論争があった。その論争の総括をここで行なうことはできないが、[12] 少なくとも現在でも、科学哲学者の間では実在論と反実在論の間で議論が戦わされているようである。そうであるとすれば、反実在論的科学哲学の可能性は十分あるように思われる。そうなれば、野家の議論も、アップデイトされた反実在論的科学哲学に基づいて十分展開可能であろう。いずれにせよ、反実在論をとったからといって科学や客観性の基礎が危うくなることはない。この点で筆者は、物語り論の立場をとったとしても「歴史家どうしが相互に歴史的仮説を検証し反証し合うこと［は］まったく妨げられない」（野家二〇一六、二一五頁）という野家の見解には全面的に同意したい。

五　結びに代えて

これまで見てきたように、歴史の物語り論と歴史実証主義とは、その見かけほどには双方の主張は対立するものではないのだが、過去についての反実在論をとるか実在論をとるかという点で真っ向から対立する。歴史実証主義者は、歴史学の客観性ないし科学性を保証するには実在論が不可欠だと考えているようだが、実際にはそのようなことはない。反実在論的科学論は可能なのであり[13]、その延長線上で歴史学を構想することもまた可能である。そして、野家はまさにそれを行なっていたのだと思う。もっとも、実際には彼は、野家二〇〇五のあとがきで、自分の「問題関心は…『物語り論（ナラトロジー）』の方法論を歴史哲学から科学哲学の方向へと拡張し、いわば『科学のナラトロジー』を構想するところにある」（野家二〇〇五、三七〇頁）と述べているように、思考の道筋を逆方向に進んでいたようではあるが。「事実によるテスト」についてのナイーブなアイディア―それは多くの一般の人々が抱いているアイディアでもあると思う―は実証主義を支持するように見えるかもしれないが、それは見せかけに過ぎない。歴史の物語り論論争を垣間見て、科学的実在論論争の重要性を改めて認識した次第である。

註

（＊）最近筆者は、畏友の野家啓一氏から氏の著作『歴史を哲学する』（岩波現代文庫二〇一六）を送っていただいた。これは手頃な本であり、内容的にも興味深かったので一気に読ませていただいた。その折、簡単な感想を礼状に添えたのだが、もう少しきちんとした書評をした方がいいという思いが心の片隅に残った。そうこうするうちに、たまたま筆者の同僚の永井英治氏から、野家氏のような歴史学観は歴史家からすると少し違和感を抱かざるを得ないところがあるのだが、哲学

者には歴史学はどう見えているのだろうか、という質問をいただいた。それとともに、そのようなことについて何か書いてもらえないかという依頼もあった。上に述べたような経緯があったので、筆者はこの依頼をお引き受けすることにした次第である。なお、以下では敬称はすべて省略する。

（1）「言語論的転回」という言葉は、哲学の分野では、二〇世紀の初頭におけるフレーゲやラッセルやヴィトゲンシュタインの仕事に端を発する、哲学研究の方法の転換を指し、哲学の問題を言語分析を通じて解決ないし解消しようという方向性を意味するが、歴史学の分野での用法は少し違う。ソシュールの言語論などに影響を受けての、実証主義に対する解釈主義的歴史観（の提示）を指すようである。遅塚によれば、いわゆるアナール派はこの見解の先駆をなしている（遅塚二〇一〇、一六八頁参照）。アナール派については二宮二〇一六を参照。

（2）この言葉は遅塚二〇一〇から借りた。

（3）野家二〇〇五では narrative を「物語」としているが、野家二〇一六では story と区別するために、narrative は「物語り」と表記し、「物語」は story を表わすために用いられている（野家二〇一六、三二頁参照）。ここでは、引用文中では、原表記にしたがうことにする。

（4）これは、物語り論者が、真理に関して対応説ではなく、整合説をとるということを意味する。事実、野家は「歴史においては『真理の対応説』が成り立ちません。…真理に関してはある種の『整合説』を主張します。」（野家二〇一六、一二〇頁）と述べている。

（5）カーは素朴実在論（カーの言葉では事実尊重主義）のみならず解釈主義（カーの言葉では懐疑主義ないしプラグマティズム）も批判し、その両者を折衷したような立場を提案しようとする（カー一九六二の第一章参照）のだが、第一節において述べたように、結局はプラグマティズムに陥っている。したがって、遅塚がカーを解釈論者の側に入れている（ように見える）のは正しい。

（6）たとえば、ダメット一九八六の中の第七論文、二一二―二六六頁を参照。野家もダメットを引用している。野家二〇一六の一七四―一七八頁を参照。

（7）遅塚は「真実」と「事実」を区別し、史料に基づいて確認される事実を超えては「歴史学は…真実の世界に踏み込むことはけっしてできないのである。」（遅塚二〇一〇、一五二頁）「われわれは、テクストから…事実を認識ないし復元しようとしており、真実だの実態だの実像だの、要するに歴史のリアリティを復元しようとはまったく考えていない。」（遅塚二〇一〇、一八七―一八八頁）と述べているが、遅塚がここで述べていることは、史料によって確認できるのはある司祭が踏み絵を踏んだという事実だけであって、彼の心の動き（＝真実）は（小説家には関心があろうが）歴史学の対象外だと

いうことであって、本文で言うようなことを問題にしているわけではない。

（8）小田中直樹は端的に「歴史学は、一つの科学です。」（小田中二〇〇四、二四頁）と述べている。この点では、遅塚が解釈論者に正しくも分類している歴史家であるカーも同様である。彼が懐疑主義ないしプラグマティズム（＝解釈主義）を全面的には支持しないで、事実尊重主義との間の折衷を試みたのも、完全に解釈主義をとると歴史学が科学たり得なくなると考えたからであろうし、それ故に歴史学が科学であることを必死になって論証しようと試みたのである。（カー一九六二の第三章を参照。）ただし、ここでは論じないが、彼のその論証は、カーには申し訳ないが、失敗していると言わざるを得ない。

（9）現代史を考える時にはこのあたり、もうすこし緻密な議論が必要になると思うが、ここではそれには立ち入らないことにする。

（10）野家も遅塚への反論において、彼のこの誤解を的確に指摘している。（野家二〇一六、二一〇頁参照。）

（11）もちろん、これは極端な表現であって、大抵の場合、いわゆる科学といわゆる小説の間を区別することは可能であろう。しかし、理論的にその境界確定作業を行なおうとすると、明確に白黒を言えるような規準を提示することは困難であるというのが、「新科学哲学」の立場の一つの帰結であると考えられる。

（12）私見によれば、この論争は最終的にはクーン派の旗色が良かったように思われるが、ポパー派に肩入れする論者もいないわけではない。小河原二〇〇〇の中の蔭山論文や立花論文を参照。

（13）クーン自身は認めないかもしれないが、筆者の見るところでは、彼の科学哲学は反実在論的であり、（注12）で述べたように、少なくとも一九八〇年代においては反実在論的科学哲学が優勢になったように思う。そのころの反実在論的科学哲学の文献はたくさんあるが、日本語で読めるものとして少なくとも次のものを挙げることができる。L. ラウダン『科学と価値』勁草書房二〇〇九

参考文献

E.H.カー『歴史とは何か』岩波新書一九六二
M.ダメット『真理という謎』勁草書房一九八六
L.ラウダン『科学と価値』勁草書房二〇〇九
小河原誠編『批判と挑戦』未来社二〇〇〇
野家啓一『物語の哲学』岩波現代文庫二〇〇五
野家啓一『歴史を哲学する』岩波現代文庫二〇一六
二宮宏之『マルク・ブロックを読む』岩波現代文庫二〇一六
遅塚忠躬『史学概論』東京大学出版会二〇一〇
カルロ・ギンズブルグ『歴史を逆なでに読む』みすず書房二〇〇三
カルロ・ギンズブルグ『歴史・レトリック・立証』みすず書房二〇〇一
小田中直樹『歴史学のアポリア』山川出版社二〇〇二
小田中直樹『歴史学ってなんだ？』ＰＨＰ新書二〇〇四

Controversy on Postmodernism in History

Hiroyuki Hattori

Abstract

Since 1990's postmodernism has influenced many historians, and as a result a controversy between postmodernists and positivists started among historians. And it has continued until now. In Japan, Professor Noe developed his own Narratology, which is a counterpart of postmodernist idea of history. As expected, some Japanese positivist historians argued against his idea. In this paper, the author will review the debate (especially, the debate between Professor Noe and Professor Chizuka) and make clear what the essential point of the debate is. Professor Chizuka argued that we could not defend objectivity of historical knowledge if we accepted the postmodernist view of history. The author will discuss that his argument is not convincing and show that the postmodernist view of history is compatible with the objectivity of historical knowledge.